

(講 評)

## マット遊びの報告から

飯 田 正 江

新しい教育要領は、「環境による教育」を幼稚園教育の基本として明示されている。幼児が自ら意欲をもってかかわり、活動を生み出し幼児の主体的な活動の展開を願っているのである。この坂城幼稚園の「マット遊び」の研究は、正にその実践報告であったといえる。

まず、家庭で不用となったマットレスを沢山集め、保母、父母、子供達で、大きく厚い、真っ白なセーフティーマットを6枚作った。この大きなふかふかなマットを子供達が初めて見た時は、きっと歓声を上げ、ころがったり、はねたりしたことであろう。

子供の好む動きは、這う、ころがる、飛び降りる、ぐるぐるまわる等であり、これでマット遊びへの動機づけは充分できたといえる。そのマットの特性を生かし、使い方を工夫しながら、幼児の発達段階をふまえ、上手に指導されている。研究発表は、十分な資料とビデオを観ながらであったので内容が良く理解でき、子供達の生々とした積極的なマット遊びへの取り組みが力強く伝わってきた。4歳児が高い脚立の上から飛び降り前転したり、5歳児が舞台の上からスプリングマットに飛び降り、ジャンプして空中回転をした時など、会場からどよめきが起ったほどであった。新しい運動に挑戦する時は、勇気と決断がいるものであるが、これを可能にしたのは、計画的な指導と、子供が自分自身の運動能力を信じたことと、それらをすべてつつむように受け止めてくれる、安全なマットがあったからである。

先に述べた「環境」を考えると、この特殊なマットの特性をふまえながら、さらに画用紙や丸太や布で川を作ったり、平均台、脚立、タンバリン等を取り入れ、楽しい

音楽を流しながら行っている。それらは、子供の興味を引き、やる気を起こさせ、運動技術の向上に大いに役立っている。そして何よりも保母が空中回転をやってみせられる技術を持っていることは、子供にとってすばらしい「環境」なのである。

この研究の中で、「変身の楽しさ、模倣動作をする楽しさを味わうことができる」。また3歳児は「いろいろな動物になって遊ぶ」、4歳児は「ウサギやクマやカエルになって仲間と助け合い、山や川など険しいところを楽しく乗り越える」とある。幼児教育の現場では、よくこの様に動きに名前をつけてやったりするが、これは便宜上のことであって、本当に子供がそのものになりきったり、模倣しているわけではない。高い山を乗り越えたり、川を飛び越す時には、そのことに夢中で、ウサギやカエルを意識してなどいられない。つまり、心を動かして表現しているわけではないのである。マット運動のねらいは、与えられた運動を正確にできるかということが重要なのであり、表現とは全く関係ないといえる。

今回は、このふかふかなマットの上をバランスを上手にとって歩いたり、はねたり、ジャンプしたり等、運動そのものをねらいとして定めるべきである。

この特殊なマットでの遊びは、本研究の主題である「子どもたちの遊び（生活）に必要な力」が、心身共に充分育ったといえる。

さて、次に子供達は自由遊びの中では、このマットをどのように使い遊びを発展させることであろうか。興味のあるところである。

(本学 教授)